



気温の状況、雨の降り方、虫の鳴き方、風の吹き方、季節ごとの野菜、川の色・・・戦前や昭和時代後半を過ごしてきた方々には、これらが明らかに違って来たことを感じておられると思います。終戦前後の学校の日誌には正午頃の気温が毎日記録されていますが、8月は27～31℃ほどで、32℃以上になることはめったになかったようです。以前は夏によく食べたマクワウリ、最近はあまり見かけなくなりました。

かつての紋章

市章や校章、社章などの見慣れている団体のシンボルマークは、普段はあまり気にすることはないかもしれませんが、けれども改めてその由来をみると、そこにはその団体の目指す理想だけでなく、歴史的社会的背景が映し出されていることもあります。

今号では市域に残っている今は使われていないかつての記章(徽章、旗章)をご紹介します。

三種の神器の校旗

拝見した時に思わずハッと息を呑みました。剣と鏡と勾玉・・・いわゆる「三種の神器」です。校名には「大沢町立尋常高等小学校」とあります。保存状態も良く、虫食いや色褪せもありません。昭和16年(1941年)よりも前に作られたものです。(現在の越谷市立大沢小学校は大正11年に大沢町立尋常高等小学校となり、昭和16年に大沢国民学校となりました。)残念ながら校旗の来歴や経緯を示したものはありません。明治期の天皇巡幸の際、大沢町の旧日本陣跡で休憩されたことを記念しているのかもしれませんが。



(越谷市立大沢小学校所蔵)

「違い鷹の羽」の村旗



出羽村紋章(近現代資料より)

村の罫紙に印刷された紋章です。
(「違い鷹の羽」の中央に「出」、周囲には6個の「う」で「むら」というデザインです。)

現在の市域は戦前(明治22年以降)には2つの町(越ヶ谷町、大沢町)と8つの村(大相模村、増林村、新方村、桜井村、大袋村、荻島村、出羽村、蒲生村)でした。ある時期から各町村には紋章が制定されていました。その中の出羽村紋章については、本市近現代資料の中の文書に残されています。それによると、『第一条 御即位ノ大典ヲ記念スル為メ本規程ニ依リ出羽村ニ紋章ヲ制定ス』(「出羽村会議部会議録」による)とあります。大正4年(1915年)のことでした。“御即位”とあるのは大正天皇即位のことです。大正4年はわが国が第一次世界大戦に参加し、中国山東省のドイツ軍を攻撃した年でもあります。

この時期、全国的に町村紋章の制定が広がりました。和歌山県のある村の

記録には、全国あちこちの紋章調査が行われ、その中に出羽村のことも記されていました。この背景について「旗章学」の研究者である大町駿介氏に伺いました。その概要は次の通りです。

- ◆20世紀初頭は外に対しては帝国主義化、内では普通選挙運動や護憲運動が高まりつつあったので、内務省を中心に報徳思想による国民教化運動を進めていて、その一つ的手段として町村が紋章を定めることを推奨していたのです。

日本旗章学協会が発行した研究誌『旗章学』Vol.2（2021年12月31日 日本旗章学協会発行）には出羽村紋章も紹介されていますが、そこには次のように論述されています。

- ◆市町村旗の制定が活発化しているのは、日露戦争前後の時期にあたるといえる。この時期は戦時財政のもとで疲弊した地方を再興すべく実施された「地方改良運動」の実施時期に重なる。（中略 この運動の中で、当時内務官僚だった佐上信一が「団体精神養成の手段」として村歌と村章の価値を高く評価していることは特筆される。

また『越谷市史 二』には次のように記されています。

（日清・日露戦争によって）地租増徴となり、地方財政の膨張は農村の生活を圧迫していった。このような村々の状況に対し、地域ごとに風俗矯正会や貯蓄組合を組織させたり、内務省は町村の目指す方向について公共心の発揮、市町村是の実践、良風善行の奨励などを掲げて、各町村の努力を促している。（一部略）



その後、この紋章は村旗にも用いられました。昭和17年（1942年）頃の戦死した出羽村出身兵士の村葬の写真には、葬列の中に村旗が見えます。葬列の前で警察官が持っているのがそれです。この兵士は昭和14年（1939年）に召集されて中国戦線に従軍し、翌年中国で戦死されました。22歳でした。市立西中学校から寄贈された史料にあった「出羽村戦没者村葬名簿」の中に、この兵士の名前がありました。村葬が当時の出羽尋常高等小学校で行われたのです。この写真は小学校での葬儀後、埋葬地までの“野辺の送り”の様子と思われます。

